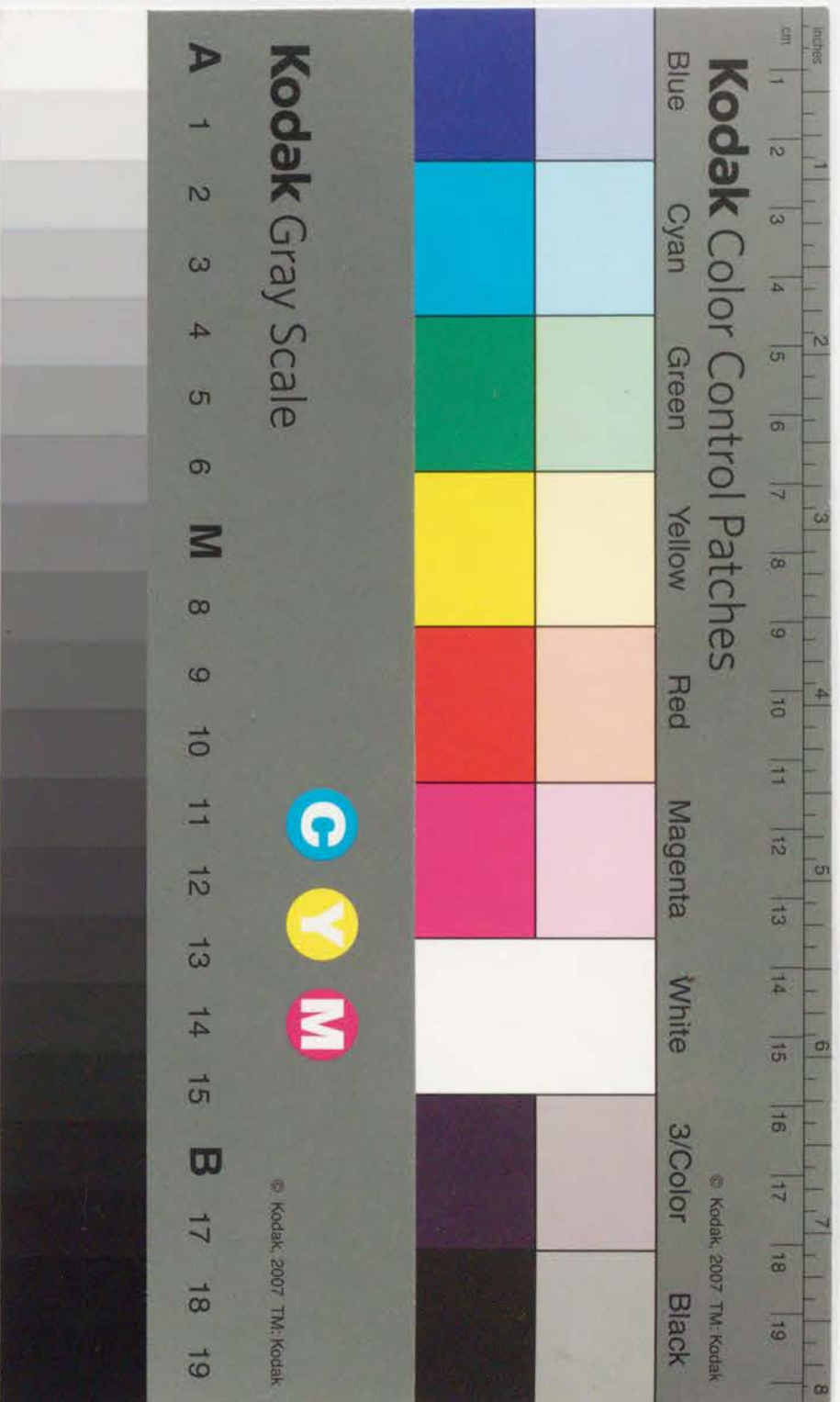




和漢二十四貞女傳

八島
五岳

八島五岳老人輯



味漢 廿四貞女傳

書肆

耕價堂藏



漢 廿四貞女傳
一 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
二 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
三 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
四 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
五 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
六 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
七 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
八 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
九 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
十 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
十一 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
十二 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
十三 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
十四 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
十五 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
十六 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
十七 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
十八 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
十九 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
二十 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
二十一 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
二十二 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
二十三 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻
二十四 蘇少卿妻 蘇少卿妻 蘇少卿妻

○山名氏清妻

○孟光

○董氏

○於栗

○陳壽妻

○文德皇后

目錄

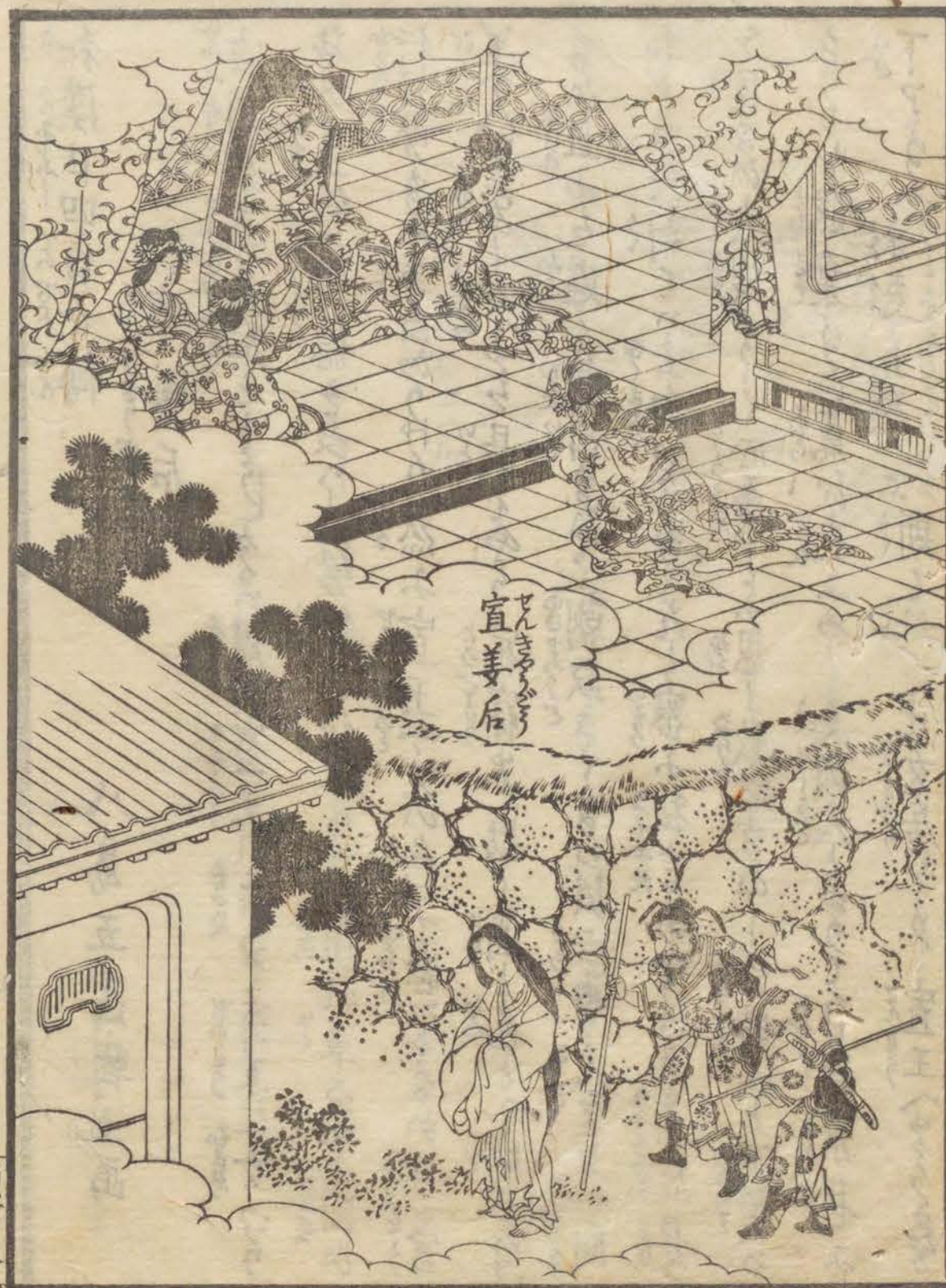
和漢廿四貞女傳

○宣姜后

八島五岳輯並画

古周礼宣姜后とやうに周礼宣王后とて齊王礼女あり
其の生質賢徳をみるに給ひ仮しめ非禮れ事るんといひ
行つたる事なりけり然ふ宣王二ふ色ふ惑るのみ只管
美人を愛し夕ふを最とて宿寐中へは酒と色とを明と
めひ且あら遅く起出ぬ朝政きくめらば心ある人々を一向
おどろけ断て去向いぬと密に私言あへけり姜后是
を因ひ太浅ゆく心憂ふと思ふ歎せぬ一ときと御影の
くさつて脱棄ぬ荒れ衣ふや更囚人とありて自親永巷ふ
下アといふ永巷と宮人を断て冊に礼女房とて宣王へやうと

給ひたりける當時は、君ひとまゝに禮義と捨つゝ色ふをさぐり酒を
あへて夕ふいそやう宿寐あり且あに遅く起つてその朝政きくめ
げせれ乱れ是より起り侍はん大凡君れ行ひの悪うをせむ
も善うを務めむも皆その御側ある女れ行ひよる事をして侍
あり然る斯うに妾あに側あるがう君をして無道れめと成
し奉りたる當ふあに妾が才より意はさるが故なり是を
りて妾が罪いと輕うに侍へる當永巷より下てとべり疾を重に戒
み行ひを改むべしと曰ひあやう給ひたる宣王あにを聞しめむ大い
お驚れ且あにむを給ひ是れに朕過らして些う后に罪有ふあり
む朕今より行ひを改むべしとて急ふ后を永巷より伏け出しやあ
せ原れ御位より返りてむるみ夫より、夙より起りて遅く寐せむ入て



朝政心を用ひてはる行の勢のひたるあど竟ふ周れ中興の君と
 中興に御興後れ世までも傳らせぬひたり是る后れ材徳
 めでて礼義をまゐる勢給ひて能君を諫言のひふよる要あり
 委ふ列女傳ふ見ふ

○王貞婦

宋れ王貞婦の臨海れ人の女めて王氏あり具頃戦ありて世間
 さらばく至元十三年元れ大軍江をわたりて天台ふ至りて國中を乱
 妨れ元れ千戸官ふあじ此王氏が面れを看て掠とりて其夫を
 らる男姑をのめ殺し王氏をとて妻ふせんといひ王氏
 泣きけりて自害せんといふを急ふ押とめて外れとて女輩
 此中ふあを夜昼あたりれ兵を附めたり王氏大將ふ偽て曰く

王貞婦



君妾小心をう務めふい其末あぐ契んとあそ思はるめと今
舅姑夫ふあを最わく思はる時より三ふり重く
服はとあざむ誠れ道をしる身なり斯るめめて何う
めらん務めて一周れ服とてある後の右も左もあん意み從ひ進
らびぐ是と許さ務めらびいとかう生て侍と強ちふ云け
くもむ大將是と聞て実理ぞと思ふむ然とて其供を置ぬ
ぐ尚と死間う看守せたり其年明て軍兵北とさうて歸る
とた王氏をも將て去たり一回ひとれ清康なる嶺あつりける
時やめれ兵の間をうかひ王氏指をう切血を出て巖れ上ふ
一首れ詩を認めて古郷の方を眺やり泣あがむる聲とくも高
き崖より遠くはみ身を投て死たりけり其詩も回

君王無道妾當災棄女拋児逐馬來
夫面不知何日見妾身此去幾時回
兩行珠泪頻偷滴一片愁眉鎖不開
今夜清風江上月存亡二字苦哀哉
詩れ文字石に添いつてさうに消び雨ふる日やう尚あはるうみ
見るとらん往來れ旅人らとを看て太甚かんやうに戦ひ鎮りて
後王貞婦と号せむて異なる勅さう印れ石碑を建て其
志とあは山頭小廟とたて神小祭り具嶺と清風嶺と
あはる清に風の嶺といふ名るむ貞婦れ標とともふ
世に因え高く成あたり委く古今列女傳ふ有

○阿都麻

中頃提津れ國渡部黨ふ左衛門尉渡といふ者此妻ふ阿都麻
 と云る女あり母れ名を衣川といふ具女あるをいそて袈裟御前と倅
 名と云々容貌清麗あて心さぬ殊ふやうく亦比るに佳人なり
 左衛門尉め嫁てより貞節を守る事最かこゝ爰ふ衣川が甥ふ
 遠藤武者盛遠といふ者あり當時提津れ國渡邊れ橋を渡り
 て供養ける事あり盛遠その日れ奉行めて物見棧敷の裡ふあり
 外と眺て在るふ往來人れ中ふ一人れ女具ある俗人の妻とも見
 えび具美麗に事譬るふ物あり盛遠とあるは是ふ見と少し時
 見あつて在るが然とも何れめ女なりや妻なりや窺て来よとて奴
 子として是と看せしむるふ渡邊左衛門が妻ふ衣川といふ老女女
 ると云衣川の盛遠が叔母あて有るふ盛遠やうに借も我從



阿都麻

妹も斯る美罪に女れ有るものとと思ひ唯持てして過
る盛遠と當廿歳何れ差別も唯一向に思ふてはも
猛死心と身も消るばうるむ今とて一日叔母れへ行て云
やう。儲もおゝ御あゝ美に女を持ぐなど我の給うど
他へ嫁着ぬぐどや我袈裟御前を一目見て焦死すべき
思ひあり迎て一宵ありとも逢させぬ若是をいふと我身
は焦死して死すべき獨死んやうの叔母御も與つて行る
刀を抜て心下ふう當て責迫る叔母の抱つて在る
あゝ流石に命やうかりけん儲に你れ然るうと思ふ
知で渡あゝ嫁せう然ども我の計めて計むる今日一日
い計せしと云けりあぞ盛遠とむく然るに翌日を来らめと云

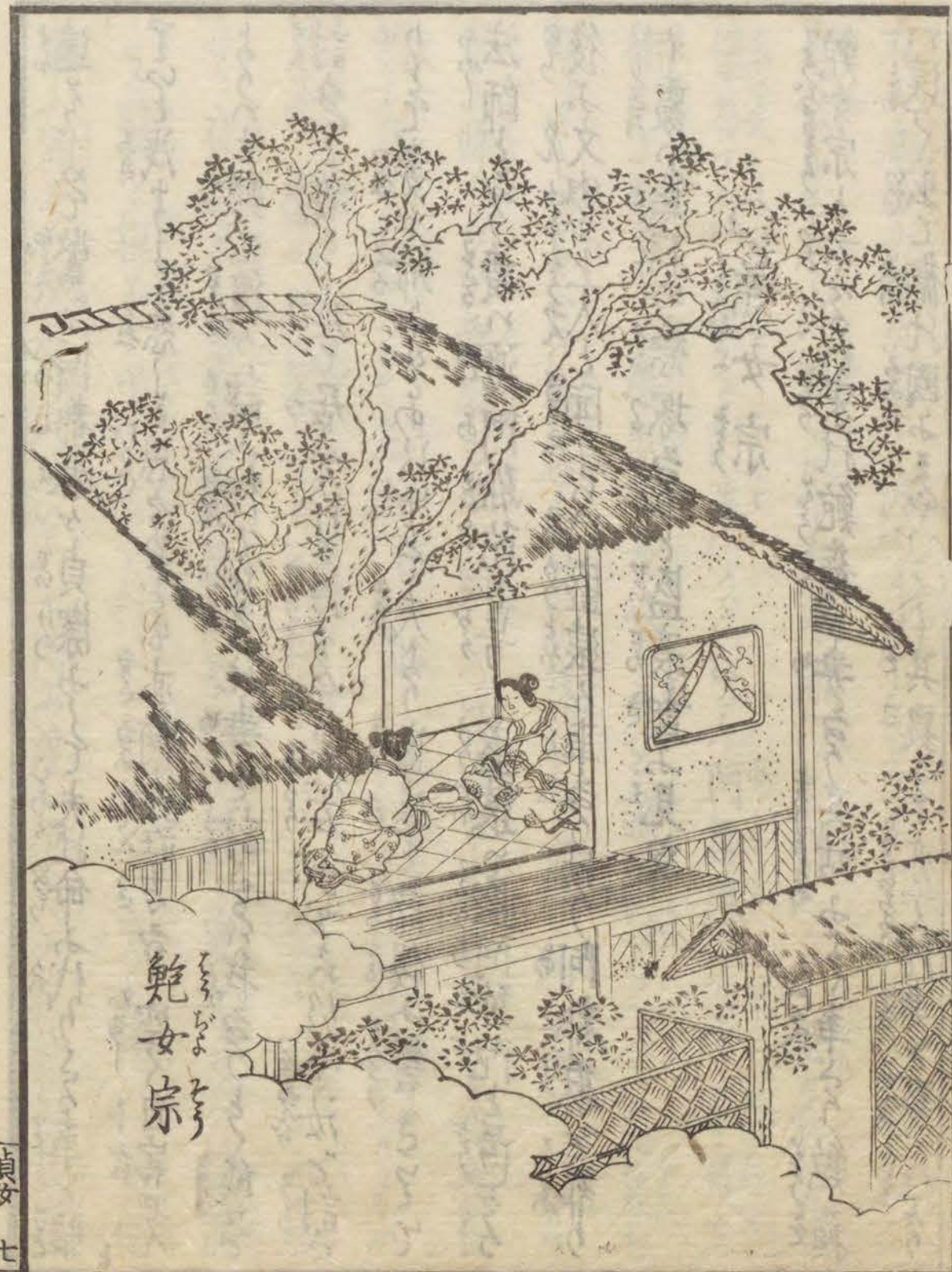
定めて歸る斯て叔母いと病ありとて人として女を呼せ
々々阿都麻の急死に母れと来りぬ母の涙も目も
らるる盛遠が事う語り語り是を否といふ時の我の命を
亡く如何せん歎に阿都麻も是を聞て忙しむ
奈何とも詮方なく然ども事既し迫る今別人に見る女
の道とて亦身を守むる母と亡ふの事事ありて
許され縁ゆても死べし唯身を棄て義を守んふやう
と思ふ母云やう此事妾もよく計り侍らん心易く
御座うと云々あぞ母のやう心おちぬ盛遠の次は日の
明るやあそと装束つゝ入来り阿都麻を迎へて
さても君れ御心ざし母に委く聞えぬ母れ命をいふ

右も御心お従ひやうにござへし然ども互み打とけりて契んこと
本意おもあはれ願ふ今宵左衛門を討めんと云々をばり
遠谷て然を渠を討事いふに参らん阿都麻が云やう今宵左
衛門の髪あつた方臥てあへて夫を證み討め入るに夏を
かゝくと教ふに盛遠よりうらば然を今宵と紛を定め別を
家にお歸り阿都麻も母を別につげ泣き家にお歸り其夕を
何とある土器とて左衛門の酒をとりめ夫を外にお臥さしめ
其身の髪ぬじし髻ふと烏帽子ひたせと云つる間や居
る夜深へしつゝ盛遠阿都麻が教へ夏より忍びつる濡
る髪を探めて遂に首を討め易く仕ると情ひつ其終
家にお歸り次の月八日のと聞み渡が妻人にお殺さるりと盛

遠よりめて警を阿都麻が貞潔あつて夫に命を代りたる事を悟
りしと浅うく悲しと思ふことも亦何と詮方や空く自害せん
よりいと願て渡が許み往てせよ此妻を討め我がうと髻を
討めと首を延て居るける渡も今の左右におゐるに今汝を討
りて妻を歸おもあはれとて夫より盛遠と諸俱にお髻きつて
法師とあり渡の渡阿弥陀と号し盛遠の盛阿弥陀と号し
後にお文學上人と聞ふに盛遠が事ありける阿都麻を葬り
し夏鳥羽の戀塚ありと盛表記に見ゆ

○ 艸女宗

艸女宗と云々あるに宋に艸女が妻あり其姑より事あり艸女
の遠く出て衛に國におゐるやつて其夏より亦一人に妻を娶て住る



艶女宗

女宗は是を聞くとつゝ妬氣ある色もなく姑ふ孝を尽し事
 と信やうなり往來に便あり艶獲が方へもせうおはして音信
 かの妻あり物ありなどて情いと浅く人皆を感ドけ
 然るふ具大嫁あり女宗をけりて云やう心移ひる夫あり
 斯て待めども今いふや外ふ夫をけりて我より是を扱ん
 るど勧むむ女宗答て云やう女ふ嫁てい再び契をかく
 ざるを常れ道とい唯衣食をいふと夫ふ事舅姑ふ孝を尽
 を勤とい心一道なるを貞とい能人ふあふを順とい男れ愛を
 かくるに依ふる許をいふ事にも申んややと夫れ女をさえて置
 天子の十二人諸候の九人太夫の三人士の二人あり我主の士るふ二人
 の有るに理あり其上女れふふ乗らる道七ツありて夫を乗る義

ハ一ツも取り取らぬ姫の七ツは科に始とて君の我より年々さう
給ひ嫁づれば理の愉めを道るふ却てあるをぬ事をさうして
夫ふ棄らるるやうに教の何事ぞやと言正しく云々あぞ大嫁大
の慙入て其後いめの言ふ女宗いめく姑ふ孝を尽くして事なり
宋は君は事を聞いめを深く愛思けせ世に女の鑑とも成
べにめめめとて名を女宗と給ひ課役を許し其郷をあらうと
名を著さるめいなり列女傳に載らう

○樂羊子妻

漢に樂羊子と妻の其氏傳らば羊子或と死路を行て一餅に金を
一餅に金と拾ひて家ふ歸て其妻ふ是を與らう妻の一向に慙け
云やう志士の盗泉に水を飲ば其名惡むといふや廉者の嗟未れ

食を受ば人ふ賤やうむいなり
志士といふものなりある士は盗泉と外より
のぬめと云事なり又廉者といふ心直なり人の嗟未れ人の
を求んとて神を汚しぬ事有べうと云々む羊子は是を聞
て大に慙ひり頓て其金を原に地へりて行て拾ひて夫より羊子
遠く出て師を求て学文を勤るるが二年許とて家ふ歸り
る妻出むて何故ふ歸ぬかむと問ふ羊子さう久く
外ふありて故郷の所に思ふが故なり他は事なりと妻是を
聞て忽ち刀をとる今織うけし機杼を中より取りと断切てを
看め此さうの原蠶に繭より生じて機杼のふ作る一絲を累
てめて寸ふ至り寸を累て止むを遂ふ丈足とる然を今かく
機を断切したる今や骨ありし切空しく成て機杼のとならば

樂羊子妻



我夫此學業も其如く學ぶ事積て日々其比所を知ぬが故
 故み以て其懿德を就べし今中道より歸ぬる何ぞ此あり物を
 断切ふ異るんやと諫々多し羊子は言を感入夫より又他の
 國に往く學問を乞ふ七十年を経ゆて家へ歸り妻の家へ在て
 姑を養ひ日毎布をありて賃をとり遠く羊子に許へも饋して學
 料を助る一時その隣に雞が囿の裡へ入るを姑とて是を
 殺し羹として我るひ婦も與るを婦是を食びて涙を流し
 我活業けりひる故に他物をも捕て斯るゆゑ事な爲せ
 る夫が悲く侍ふるとして泣くを姑大に慙るるを以て其雞を
 捨ふなり其後ある夜家へ盗人二三人押入るるを妻を犯さんと
 思ひて姑をとりて刀を抜みけりるを妻是を見ておどろき姑を

故んと同じ刀を抜立向ふ盗人怒て汝刀を棄て我に従ひて姑を
 助んり従つたは是を殺さべしと一人の姑は胸の刀をさし齒一人の妻
 を捕て犯さんと其妻今の詮方なしと天ふ仰て打敷き自ら首を切て
 死にたり盗人らも思ふけぬ事なる大いふ驚に姑を捨て逃去り
 郡は太守是を聞ひの彼盗人を探ひて是を斬殺し妻は骸ふ
 備ひの礼を厚けて葬らせ貞義と号して印を建せしあはれさせ
 給ひたりは妻はあはれをせ廉貞あはて孝義の備り雄々紀
 男も猶ほの希るべし後漢書に見ゆ

○ 邵陽友姉

友姉といへり元馬郡邵陽縣に任延壽が妻あり字を李児と
 しり延壽は嫁てより能貞操をゆめり子三人生るるが何れも



邵陽
友姉

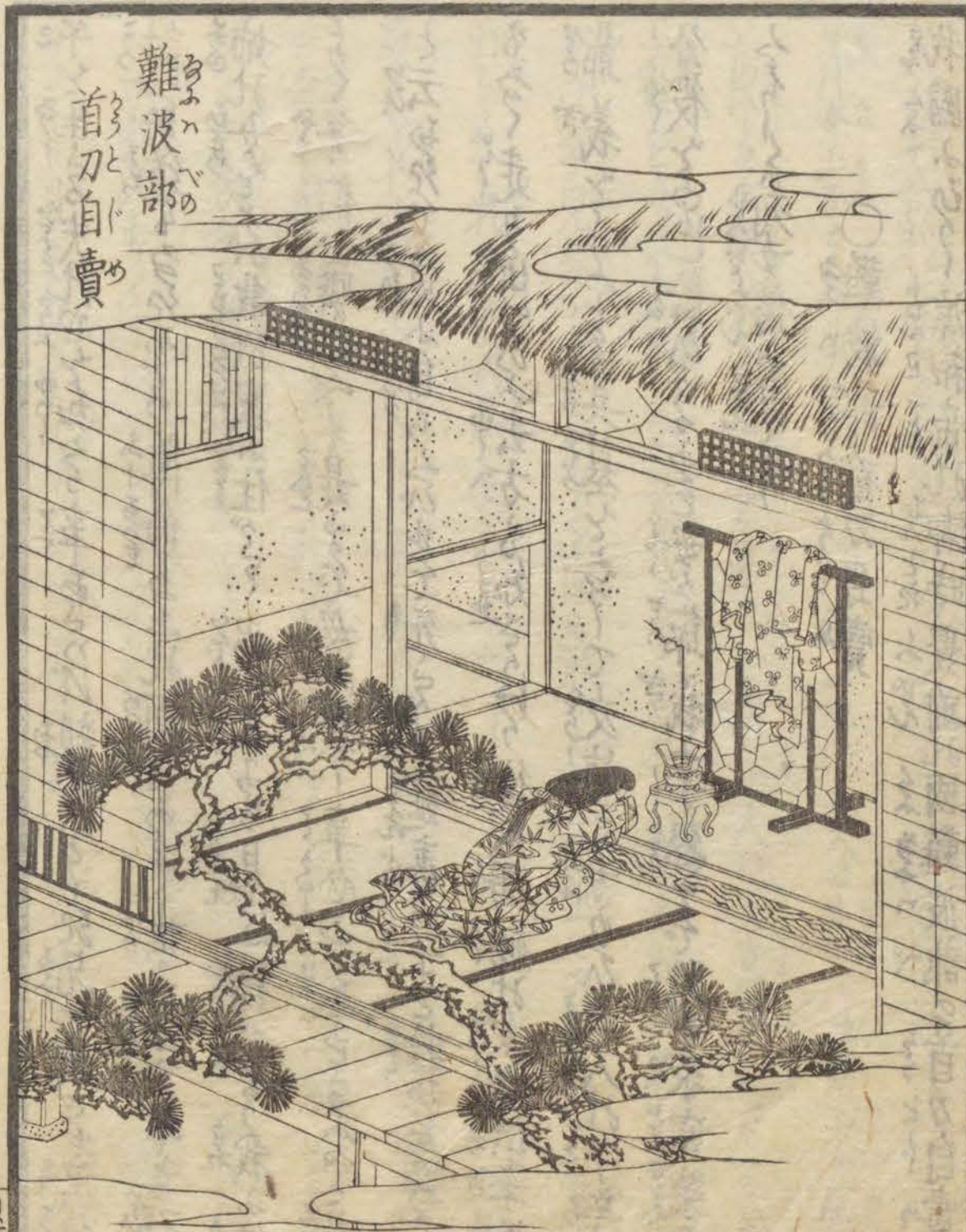
よく教て怜利を育つは李兄が兄は李宗と云る者あり夫は延壽は
兄は李宗との争ひて一端は怒あれて一人の友をうらひ密に李宗
を殺しつゝ後つひは事頭を延壽おとび今一人の友も囚むとて籠中
に繋ぎつゝ然し其一人は籠中死し延壽の赦あひて許されて歸り
妻は李兄是を看てとわくを聞も敢て身より出て去ると延壽急よ
引とめて我を恨む然るれどもかゝつゝ一人の死を詮方なく
殺さ我を殺して怨を晴けと云ふも李兄曰く凡世間も夫を殺
し妻あらんや若あらず其に不義ありや兄は讐言も事ある大い
なる不義あり何ぞは家より去るべきやといふ延壽然るに止むべ
らず家にあらず財宝馬車うちはつゝひて贈ん心も任せ何くそ
ろとも身より落て在べと云ふも妻は曰く枕をさうべ三人のそ

子を生る夫は心を和らさる事あるに親あつゝ兄を殺させ其仇を
討て死道もるにやの薄命なれば面目あて世に存へんやと云つ
姉は女とよび我は家に住ぐて出て入るも見はれ你今も我を代り
るゝ弟を憐むべし是を母は教し事必ふ忘るゝと云ふ
と云わけて竟み自らつゝ死する夫延壽の子を拾ひたつこと
もろく走り出つゝ去方も知らずけり後し馬廻り太宰守は李兄が
節義をうらみ其墓をうちて友姉と号めひ三人は子等が
公役をゆじ給ひつゝ母が節義の子孫を殊に家富榮なり
ふりゝ列女傳に見る

○難波部首刀自賣

我國ふりゝ淳和帝は御時豊前は國難波部の首刀自賣と

難波部
首刀自賣



云々女ありり年十八あて同國下宅郡大領蔵野の傍宮守が妻と
る薄命あて宮守とて身すかりぬ刀自賣容貌うしろけむい
人々年ひく迎とんと云々と刀自賣さるに再び嫁るれ心な
常ふ夫れ着るさる衣裳を旅れ上み正しおれ且夕あてと看て慕
ひ歎にる事止び三つひの食ふ必びやう旅れ上み備めり記りの
得とて此衣裳ふさるる幾年あていども是をさるる忘るあて
なり里人あてと愛いさるに貞婦と云りてさるる程ふつひあて
國に守るめえ上りて其門をさるて渠が貞操をあて家の課役
田れ租税と永く許さるるひり天長四年れ事ありと日本後紀み見ゆ

○義經妾静

静は舞妓あて磯の禪師が女九郎判官義經れ妾あり義經頼朝と

不和み成る後義つゝ漂泊して去方と設け静に迷ひて吉野に藏
 王堂に至りてと吉野の法師ら捕て鎌倉に訴ふらて頼朝より
 是をめで吉野に修行より静と北条に館へ送りて鎌倉にありて
 義經の去方と問ふるも静はつゝて実を告げ豫知の別離の
 後と山伏に姿み似せて大峯に入るはの由を述べ女人の峯に入る
 めも迷ひて藏王堂に参り侍るなりと召さる頼朝御臺所
 と俱に鶴岡の社前に土藤祐經に命て静を廻廊へめと一曲
 此舞をのぞき参らる静歌を吟じて舞たる
 志所やうつろひれと巻らる昔を今ふなひうれなれ
 とうり山峯に老く重くまわけて入り人れ跡をこひに
 と詠つ様へて舞ると静頼朝のひん前を舞とのま



秋潔婦



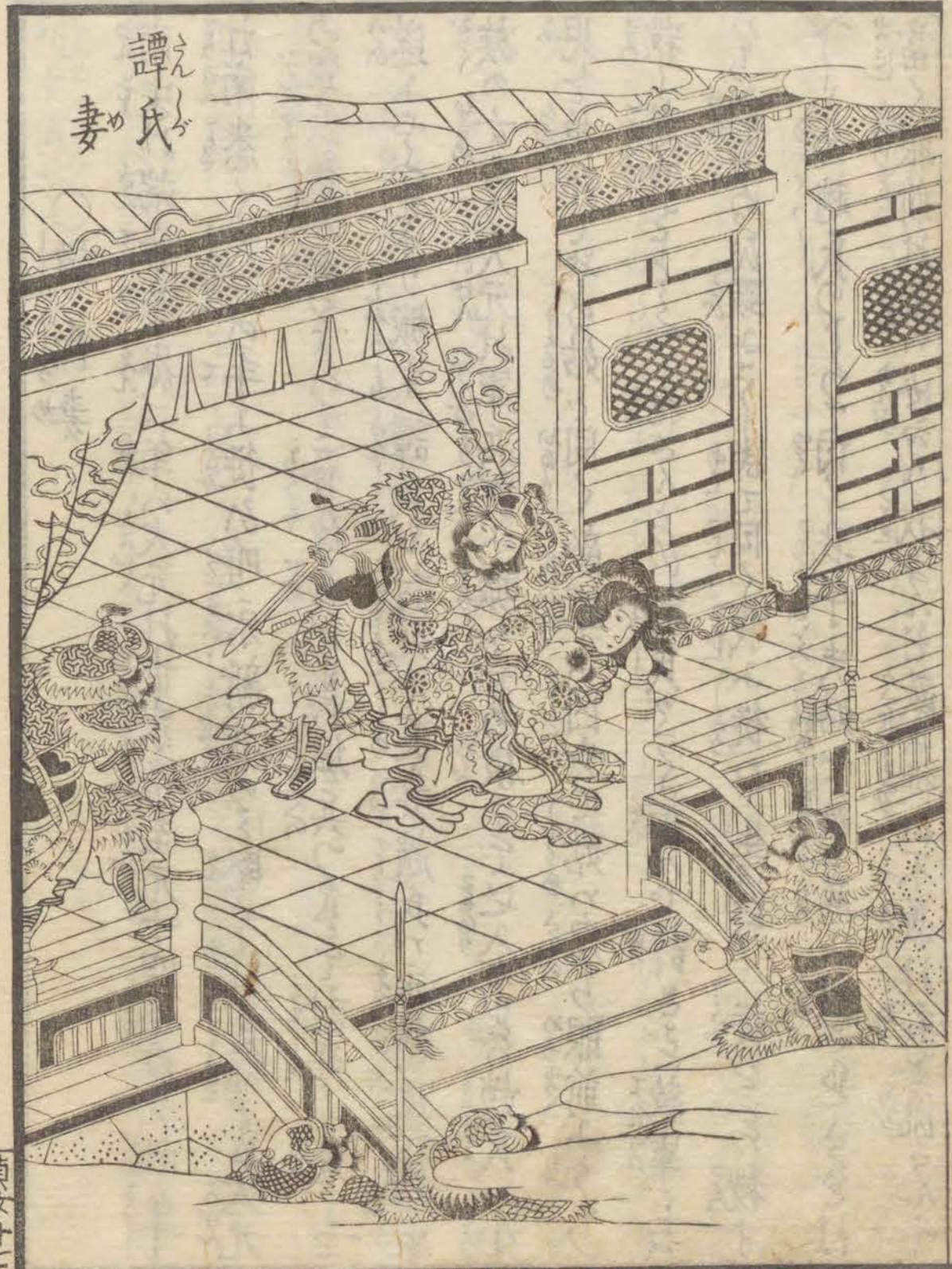
やび噫いひをなして来つゝ居ゐる秋胡あきこが回くははとめて田作とくさくの豊年とよねんふ
 あのみ如ごとけはとめて蚕つみかを貴官きくわんふあのみ如ごとけとや我われのみ金かねあり
 願ねがふと夫人ふじんふ進しんせんわむと従したがひのこといふ女をんなれ回くはは我われの蚕つみとといふこ
 織おりて衣食いしょくといふと買かひ姑ことやあふ違ちがひて別わかれ金かねもあらず唯ただ君きみ
 も仇心あぐさなく我われもやと不正ふせうとさざらんといふ我われ願ねがふとといふと露つゆおけけ
 色いろをかりけむと秋胡あきこも今いまの詮せん方かたなく其その終はつ捨て去さるる斯かくて我われ
 家いへふ帰かへつゝはむと母ははれ情なさけび大おほきとて秋胡あきこの金かねをとついで
 母ははふ献けんせむと母ははのいふと母はは頻しばしばて婦つまを呼よせむと秋胡あきこが妻めかけ烟えんより
 帰かへ来きて夫おとこふ見みるふ思おもひきや嚮むかふ来きつゝ居ゐる女をんななり夫婦ふうふと
 なつて僅わずかみ五日ごにちやと遠とほく別わかれ久ひさし逢あはさるる互たがひ子こ見みこさむ
 たるあふと秋胡あきこの耻はづかし左右さうりやうを云いふ方かたなり妻つまもひさし忙あせむ

とて涙ふ呉て居るに時不かり有て返さるるに君の親
別れて遠く人の國に仕へ年経る家へ歸るに嬉死心一筋あり
と馳せり給ふを路れりや彷徨てより女を戯し
ぬの母ふやわに家土産に金とて女ふとて男ふといひ給ひ
是大なる不孝ふやわに我妻なるぬ妻とひるる行ひを汚して
大なる不義なりや若外れ女あて心より從ひて歸て我とて
あつて是より我の見え侍り外ふに妻を嫁ぐに然るを我も
ゆゑ二心とてあつてと云つて立ち外ふ出づる忽ち近江にたれ
川ふ飛りて最も敢て死なれ是ありに烈に行ひと思つ
れども然れども理あていひたれよき女ふとて有るを猶委し
列女傳とひきき見ぞ

○譚氏妻

南宋に端帝景炎二年の大元は世宗帝至元十四年より此年
江南悉く大元の手に従ひ唯永新城の堅く守る然れども大元
の軍兵数万騎を以て昼夜責むるに城兵つゝて討死し城を
遂にやぶるに城主譚氏も討死し其妻趙氏の永新城下に豪
族の女より大元は軍兵既ふ城をや破りて入るに趙氏の小
児を抱いて姑と同じく敵軍に囚めて姑に忽ち眼前より
殺し趙氏を以て犯さんとし趙氏を拒んで許さず敵軍を
り剣をぬき頸よりあてて死す我に従ひて生じべし従ひて殺す
べしと云趙氏のよりて曰く我今夫姑と汝を爲し殺さしむるは
當く眼前に敵に汝あり我をぞ敵に従ひ不義に名を流さんや

譚氏
妻



殺さ疾うに我義を守りてやうに汝が手ふ死んじ殺せうとて
 小兒をいざなひて身ととり付て言ふところあぞ敵つひふやと
 趙氏をも刺殺し其血をみそて城に禮殿兩楹の間ふひこる
 ちたがうふ隙入る婦人の小兒を抱ひたる状に歴然として移り
 著る世靜まてほ是をやり捨てやうに餘に砂石をみそる兩楹
 を更めたるども其狀を著る炭火をとりて鍛えらるるや
 其の狀あつて止むに正し更めたる狀もく頭を滅せ
 ず諸軍をなすの貞烈に奇特を感賞しと云う古今列女傳に有
 ○慎氏
 天祐年中、中岳亭といふ處に儒家の女、慎氏といふ才ありて
 文を善く、夫を經氏の人とて遊學せしむ。收養ふ遊びて慎氏と

慎氏



見^ミ其^{その}艷^{やう}姿^さを^をあ^あの^の父^{ちち}あ^あの^の是^{こゝ}を^を娶^{めと}り^て本^{ほん}國^{こく}斬^き新^{しん}春^{しゅん}ふ^ふと^も
 ろ^ろの^の歸^{かへ}り^て數^{かず}年^{ねん}む^むの^の住^{すま}う^うと^と一^{いつ}向^{きう}ふ^ふ子^こを^を生^なぜ^せば^ば後^{のち}を^をな^な
 先^{せん}祖^そへ^へ不^ふ孝^{かう}を^をな^なと^と厭^{いと}ぬ^ぬ中^{ちゆう}を^をむ^むど^どの^の是^{こゝ}を^をい^いづ^づと^と去^さり^て島^{しま}亭^{てい}に^に父^{ちち}乃^{なり}
 め^めと^と送^{おく}り^て歸^{かへ}り^て慎^{しん}氏^しを^を立^た出^ださ^さり^て頻^{しきり}て^て一^{いつ}首^{しゆ}に^に詩^しを^をま^まけ^けて^て
 夫^それ^れ許^{もと}へ^へあ^あり^て遣^{つか}へ^へ其^{その}身^みの^の船^{ふね}ふ^ふら^ら乗^{のり}て^て涙^{なみだ}を^をふ^ふ出^だ去^さる^るの^の
 詩^しふ^ふ同^{どう}

當^{たう}時^じ心^{しん}車^{しや}已^い相^{さう}関^{かん}
 便^{べん}是^し孤^こ帆^{はん}從^{より}此^{こゝ}去^さ
 夫^その^の詩^しを^を看^みる^る哀^{かな}ふ^ふ悲^{かな}しく^く悽^{かな}感^{かん}ふ^ふと^と再^{また}召^よさ^さる^るへ^へ
 遂^{つい}に^に偕^{とも}老^{ろう}れ^れ契^{ちぎ}と^とす^する^る唐^{たう}宋^{そう}遺^い史^しふ^ふあり

○下野國女

下野國女



下野國夫婦者とてわづらけり年来とせける程夫
 外妻をさへけて心より果て其家より有る物どもを今
 妻に許ふに拂ひてて運びゆく心憂事ふりへども詮方
 尚とらふに伏ふせとて見たり塵バウレ物も残さず皆
 行て唯のありする物の船一そのを有る具夫とて真楫と
 いる童を使ふる此真楫とて亦その船をもとりみ越せり
 斯てその童船にたて去んとする時女に云るいづれ
 消息聞え
 けぬ真楫きうそ何なりとも告させぬ最と告やあつたんと云
 たる女詠々

船も去ゆらば見えにやふらの憂世れ中といふでやうん

け哥をくもぐと教ふるに真棒くろて夫も斯とつてへる夫は歌を
 けめていと哀み思ひ感ふへる今に妻と急み去りかた拂ひ
 れの皆をくもぐ返して元は如くぞ添居あたる大和物語ふん由
 輯者曰は書りて女童小見せんそりめをるる文章本文と此を以て
 俗みつて此一條ふりぬる外もまた同ド理を唯とせわり安うんことを要す

○孟姜

秦に范杞良が妻の名を孟姜とよび富る人の女あり其の
 父杞良を聳くて我家に入らり杞良は家来てより三日
 過る頃軍役ふさむとて長城といへる遠征とよめ行く久く返ら
 ず天寒くくろけむに孟姜冬に衣服を縫て送りやりたる然に杞良
 はかゝりて討死しけり孟姜あを嘆め泣きつゝ遂に我家を惑
 ひ出て長城へくろ行朽くものなる骨を拾ひてと荒る野らと

孟姜



さぬふ歩行あら散乱する白骨に累々たる中をい何れをせむ
とめ分ち難く孟姜が指を切り血を出し若くは夫の骨をふぶの
血ふくると天に祈り地を伏し有とありける白骨にあらぬ血を
滴りのけて身をあらけて尋ねる天孟姜が貞心を感じてあや有
く一ツに觸腰に孟姜が血を染入るあぞ大い懐びる血を
染して五臓をひらひ集め布につけて後小背おひゆる遥々と帰り
くるが女が力なれぬ心の先きして程なく労を疲れとて潼関と
云ふつむて今一足も行事あらぬ肩を只ある巖の上におた
其くくく居て死せり彼れ人ぞの節義をかんて愛憐
そ杞良が白骨孟姜が亡骸とひとの葬り土地の司ふやうして
孟姜が容を刻し祠を建て後世までも祭り新續列女傳

○崔氏

唐の崔氏といふ女あり縁ありて盧校書といふ人れ許へ迎らむ
て適たり崔氏八年若くして十六歳なり容清麗ありて位に
然る富ありて夫れ盧校書の八十餘歳の老人ありて容醜くあ
るも面をむく居んやうに程なり且家貧く官も早く一ツとし
取らむ然る崔氏の親のむとび縁をむとて殊にあむと
恭ひやうと心を尽くして事る翼をあらむ枝をつね夫婦の如
く家を偕る車年夫なる者あり傍より校書のうさ年老汚気なる
身を早下して若崔氏が嫌やうんと疑ひぬ我縁を断てはめ
異く縁づぬとて時小婦をてい云々あぞ崔氏一首れ詩を
作て回く

崔氏



不_レ死_ニ慮_一即_レ年_一紀大_一

自恨_ニ妾身生太晩_一

不_レ死_ニ慮_一即_レ官_一職早_一

不_レ遇_ニ慮_一公_一年_一少時_一

は心い夫れ年太齡ううとて死ふの思ひぬなり又官位の早

死をいふ心なり唯恨し我身が夫より遥み遅く生れ

を夫れ年若くをやなり時み遇ざる残多うと云事なり

尋常れ婦人なる夫れ年太貧乏を嫌ひ凡そ死して早め我

身と高き時ふて過言なり親れめと云送りて縁を断外

へ嫁んと思ふべし此崔氏の親の嫁せ縁をばとて些もあを

きうら貞節ふ事しを又有とて例あざあり

○唐貴梅

明の貞婦唐氏の其名を貴梅との容貌いと麗く心さる貞

唐貴梅



大聲おほこゑに言いふと早く我われの言ことに隨したがひ財しやうを得えて樂よろこむを極きまめざり
 痴人ちじんとて婦人ふじんに臥房ふふやうに入いて見みゆ貴梅きばいのあはれ不審ふしんふ思おもひ
 爰こゝか尋もとめざり頻しばしばて前裁ぜんざいのどく梅うめふびき貴梅きばいと看みる
 大おほいど夢ゆめさうと泣なり衆人しゆじんのむと看みるのづかり日頃ひごろ不孝ふかうと
 いひ罵ののしり憎にくみ婦人ふじんに死しるを看みていふ然しかるで泣なるぞと云いはれ
 む姑いへれ云いはる我婦人われふじんに死しるを悲かなむあはれ今いまより物もの々々人々ひとら
 らんがかなとて我われ言ことる人ひと是こゝを同おなくすは憎にくめりたり花はな
 右みぎとる程ほどふ三日さんじつ過すごるやで死骸しかい樹きふからとて在あるがやを生顔いんがふふ
 替かへらじとて貴梅きばいが夫そとの愚おろなる者ものさふ何なんの妻つまが死しるのと
 いふ事ことも知しり頻しばしばて司つかさどみ訴うるふ司つかさどみと賄賂わいろを得える事こと々々
 解とく遂ついふ亡骸おなと葬もようりたり後のちも月つきあか梅うめの夜よ々々その

婢る貴梅が姿なれふぞ見るとあやうじめど土地れ司のまう
罪とあそくが故ふ貴梅が名とあやうじめ後ふ楊升庵と云ふ才人
は事と関したるうて貴梅が傳を作て世ふひろく弘めたりなるは
委く閨範圖集と見べし

○元姫子

元姫子の都れ東の洞院とらに住く歌れ道ふらぬに深く手と
つとまがらば万般ふつけ最やにかり々む若に男ども友玉づと
を送りて云とる者まかりけむども露なびく色もやうとるふ爰
ふ山名中勢太夫の郎従ふ喜家九郎とら者あり心なる艶く義と
知れ武士と有るが不斗の元姫子と見添て媒の人と求め
まて送らるふ如何ありん元姫子こそふかたて快く返

事をはらう浅くぬ契と成り斯て五年あより過るふ明徳
二年山名陸奥守時氏乱とあら一族悉く討入る内野に戦ひふ
あふ喜家九郎の母の死とも元姫子を四条に道場ふ忍びせあて
内野へおれむ紀とるが八幡とて人数れ手配あけらば軍とらじ
ふと思とるあが喜家九郎鬢の髪とに切とる文々に添てかき
物則一人の郎等ふめとて女房に方へ遣けり四条ふ元姫子
々の戦ひいと案居る夢へ夫れ文の末とる取回めとらと
打ひきて看ふやう方去向け事と書つけて其中ふりも我
は戦ひふ討死とらと関の勿論れあん事とる逢と別と驚れ
りとの古果ふ歸らん斯うやうこと人ふ見えのやう喜家九郎と
ゆりのふ暫時の縁ふのうれて結びくわりの餘波といゆめ語ら

元姫子



なほ備ぞ草葉に陰くく死後れ世の末までも嬉し思ひさう
うぶにたどる涙めく奥ふ

別れそのやう逢やぞと思ひとや記念うけりせれこれ髪
鬢れ髪さう巻きて涙れせれお書乱くう儂墨うさぐ

そまどおのころはてさうふもなれ文を九郎に母りくともお讀
ては泣き死てふも少時が程に打臥るる女房やう顔とあけて

うてれ人の心やなけ年月に永に夜を睦く語ひくわうを
想ひやうなけ空に死苦れ下やぞも同道やと契しものを

弓箭れ及るや女に身とて協とて書きつ事れ耻しけ九郎との
り討死しぬて後あさるを替うともうや憂せお降るをれかる

袖とらふも知れど重ねて他ふ新やうう双ふも死の心を同く世に

ある其内ふ斯と知分てう人ふ心安く肉せんと自ら刀をとう出て
夫る碧れ黒髪を根よりぬひとわ切て使の前ふさう出腰み梓
れ老の末中て二張れす引とじと今を盛れ花の身もなると
はのあると成て中々女のいふの詞いふて

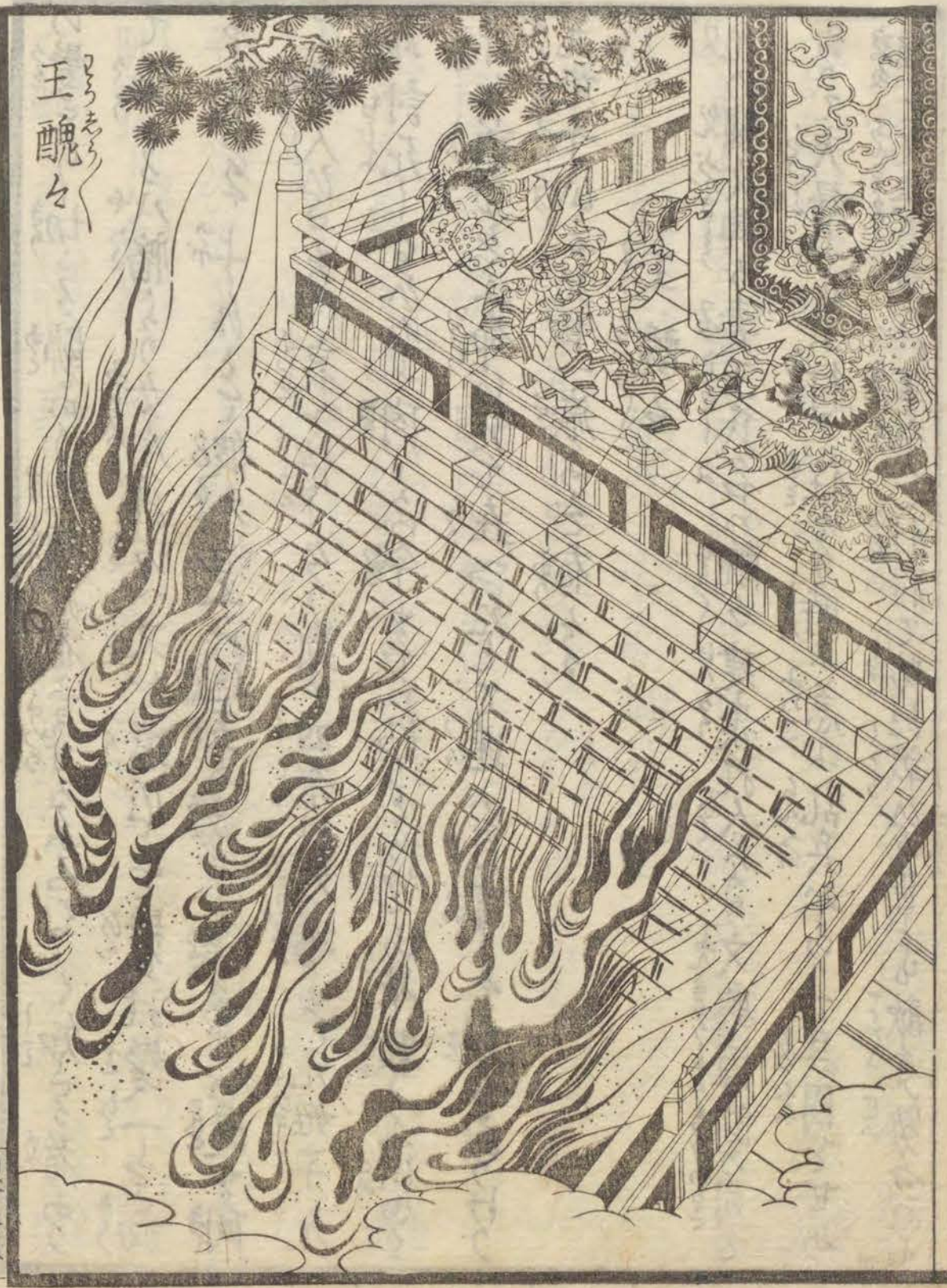
一とらふ思ひきうて我黒髪れかる乱の世をやらうみん
とばう書て切る髪の海松房れどくると返事あててうく
使ふとらうは使八幡ふうて九郎ふ是と與々む九郎是
と看て大いふ悔を余ふ心れ苦さふ文れあやうの書ううく
今思ひあ事はうは心れ憐ふ討死せんと女房れ文と髪と
肌ふや入京都ふゆひき内野れ合戦ふ山名宮内れ兵と戦ひ
て敵あふ討う具身も遂ふ討せうう具首と看ふたの鬘

貞女世

の髪とらう切る跡あり生捕れ者ふ尋るふらうく知る者あり
て語る八幡より女房れ方へ文を遣はて鬘れ髪一ふと切
ゆれあやうはと彼元姫子れ返事の歌を語るは是を肉
て衆人ひさる哀を催うう斯て四糸れ乃場ふ元姫子九
郎討死しぬぬと肉ふ今やうはうともや頼ふは
未と誰あふ命いふて在て遂ふ自害て身やうけり
元姫子いと死廿一歳あそ有る

○王醜々

元の関文興が妻王氏名の醜々建康れ人なり文興漳例の司
ありて夫婦ともふ行住う時ふ急ふ乱兵あありて其國をせめ
悩と文興あふ軍卒を引將て防戦ひなむと敵多勢あふ



王醜々

當以遂み爰めて討死しつゝ敵文興が妻に王氏をよこへて是を
 従へ妻おなさんと云ふ王氏歎いて是彼といひ遁んとせむども免ず
 王氏心ふしつれ謀計を生じ偽言て謂て曰く我夫を火焼く葬り
 終りたりん後いれぬも右も心ふ従ひしやうにべと敵をきつて
 然るべと思ひ々々是を許しけり王氏夫れ死骸を肩来り其死
 骸れ上ふ薪を多くつゝ上火を放つて焼あげ火ささふ熾んる時ふ
 王氏その火れ中ふ飛入り諸とも焼死る戦やんで後あやけれ
 御恵とて文興ふ諸候の爵をわづ給つて英烈と号らし王氏
 あつて貞烈夫人とて号を給つけり妻れ貞潔とて夫を名を見し
 たり亦その國司より祠を立て夫婦を双へ祭り双節れ祠と号し
 年々祭祠あつて古今列女傳ふの路なり

○裴氏

唐に李徳武が妻に裴氏字に浦英と呼て安邑公といふ公郷の女
あり容兼しく心さる優く孝行の因えあり徳武に嫁てより僅に
一年を経る後徳武のあゝ罪をわううて南海に流さる裴氏が父
あやゆけ告て其中をさる女を止め置たり徳武別々時妻に云やう
浅果ある契に云ふらひなり我路とわく堪るに境ふさるへゆけと
再び帰るにやうもは「你を父に心に従ひやう奈何せん人ふと
馴染と承く住めへらうと長に別れをせと聞えらる裴氏う
なう言て同く女に「夫事より再度外に嫁るれ道すたとい
父公何と回やうも命ふけて二心あるべし是見るゝ力をとて耳を
斬んとさうと人を驚えとわうて止めたり斯て徳武に別てより

裴氏の父に許ふ在るが化粧とせび容をさううび唯やのち疲
むとて朝夕經うら讀て目を送せり又時節に徳武の姉妹
の方へ人とやうて事同う縁を絶ざるやう一向心を用ひる昔
此列女傳をよみて女に契を改めざる事を賞しを看て二庭をふぬ
ざる女に常の事あり何や異なり記に傳るごとそ只言笑
ひるとなり後十年を過るやで徳武の音信をさふせざるやむと
裴氏が父も今いそ或人許して嫁めんとして良辰を定るやんと
嘆ひる程に裴氏忽ち刀をとて自ら髪を切り切めんと喰で
泣くやうい父是を看ておどろき詮方なく縁を断りて徳武に
彼れ國をて外に妻をゆめて住するが一年天下大赦行せらるふ
よりて徳武も赦さるて則ち其國に妻をつきて歸る途に裴氏が

裴氏



節を守りし事を因て私に感後妻を途中よりあつ返く
古郷ふかへて裴氏と元れど夫婦とあり後あり子孫さるる
とあり音釋列女傳に見る

○山名氏清妻

我國山名陸奥守氏清が妻のいづれ家より出る人といふを
あづけ其性質才ありて義を好む婦れ乃備アて慈悲深く
情をかうあり者多うし一門の人をも重くなを敬ひたり時
明德二年に冬氏清智れ播磨守満幸がとめふりて謀反
を企て將軍義満公ふそに大勢を卒おて和泉丹波より京都
討入責戦ひたせども軍つひに利ありて氏清以下人ふさる
やどの者八百人討死して亡あたり然るに氏清が子宮田左馬之介

山名
氏清妻



その弟七郎と親の討つと見え丹波路に落下し畑の城に籠
 りしとどめ人々背ひて事協ひばそむり有馬山に奥へ入て頭とそり
 熊野にへぞ落行たる氏清に内室の和泉に園堀の浦ありて軍に
 音信のつとんと胸とくろ居るひたる明る正月朔日ふ郎等一人を
 来て軍利ありて殿の討つとせむひ丸馬之介と七郎との丹波
 路に落るひぬ其外の御一門に御うとて残る討死て果るひと語り
 たる内室のうら肉のひ然ぬと夫に別のうとて二人に子とて近迷
 ひ浮名を流さるうとて今にうとて露れ命何うけて存るぞと
 草葉にうげやも亡人ありあつとと自害せんとのひを侍へる女房
 どもあつとめ斯る例のなれ世あめ侍るばこそ唯あんなを替られ
 て亡あん跡をとがうつ勢給はんあめ然れば御心ざう侍りあめと

さるどと云和めとかく敵近づる先且立平の勢あへて轎ふさき
棄て土丸れくへと急にぐる数多れ女房どの思ひくふ立退てく
難彼れ局の外女房三人をかり轎の着る居るを日根野
とる夏あて志づく休るふ轎内あつふ動揺けるさき
をうに揚て見せし小袖に袂ふ刀柄とるく咽れふえうた切てぞ
伏せり未言えはりし夫より根来寺ふたへてとめて勞り
介抱くさきど湯水とさき見せし唯時をやりをかりき如何て
聞傳へる二人は子尋ね来て何と云々さきども母の顔よりさ
けて弓矢れ家お生さるる年廿歳餘父と同一軍お立るが
親の討くを見棄て逃の身おれ夏あてに法師とるし
事を耻しとさき思ひて人れ別の歎きふ堪げ自害て死ふのさき

ら母お今と見んと何事ぞや父れさき子おせられる小次郎
ども義を重んじて俱に討死するも耻ぞやかる云々さき死者
ども子おさきとてはせお再お見ん事のゆにさき心れ乱るふ
言な云せそとて衣引ふたて臥さる兄弟ちる及さきとてさ
出て去方さきびさのち内室さきとて何やらん文やうの物
れさき少く書きて酌ふ引あて正月十三日れさき方おつふさ
る成りたり彼文やうれおの過し師走れ七日ふ夫れ氏清とる
あつし書きて奥ふ一首れ歌あり
やういふの消ぬとやの梓弓ひたてくへぬ及さきれつ
其さきふ内室を添ふひさき
さきむとさきさき越んきてさき苦れ海れ夢のさき

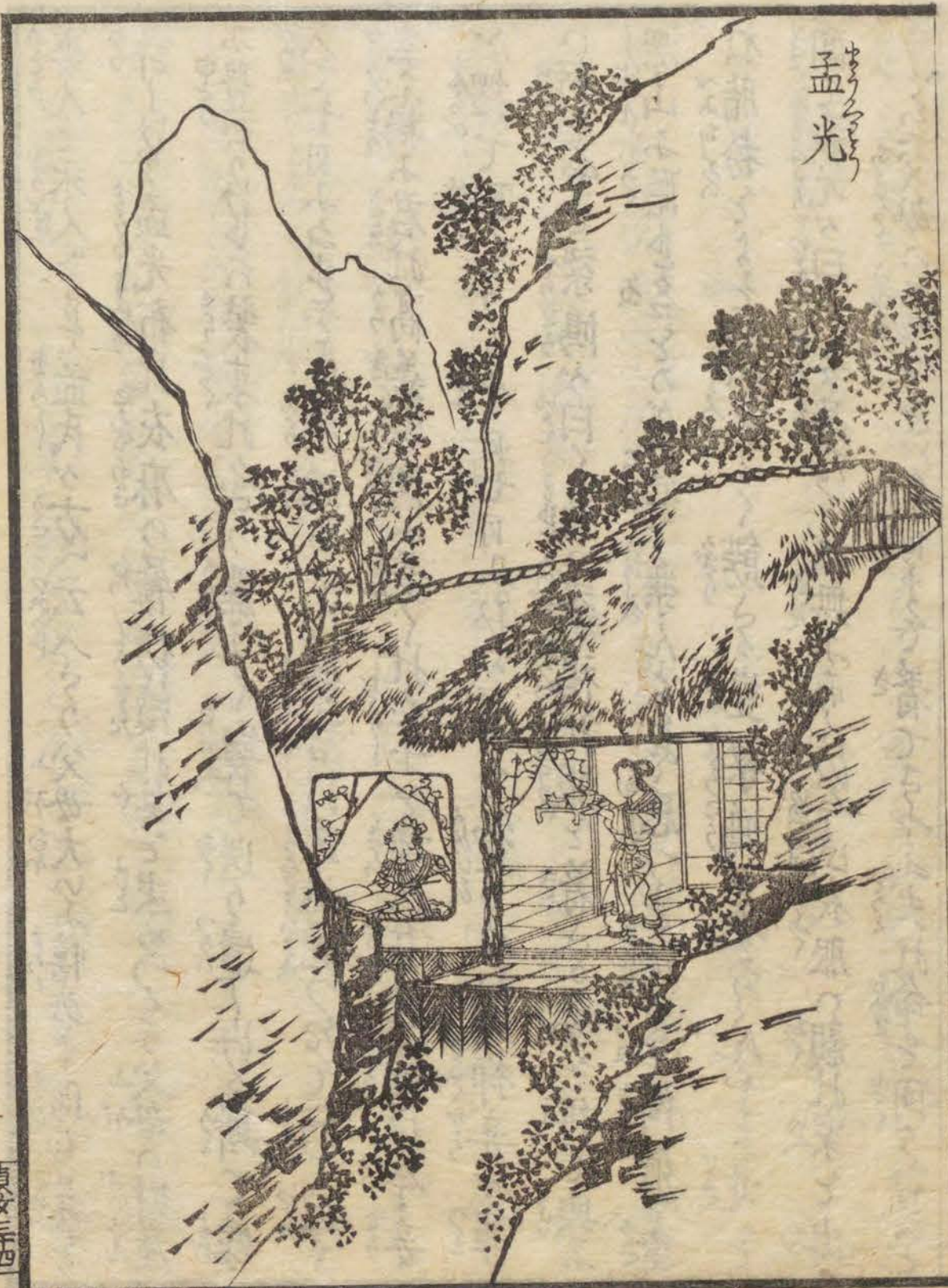
是を見聞る人々いと悲しむるあり難波此局より三人
此女房もまた旁野川に身をまげて死なるとぞ

○孟光

漢の世に梁鴻字伯鸞といへる者あり家極めて貧く節を高く
道義を守る世の清高此輩皆その風を好と衆れ婦人等ありて
梁鴻が妻とありてやと願ひの多しといへども女は道德を重く
ありてを擇とりて未妻を娶らば爰も同く縣に孟氏の女あり
孟光と名く狀肌よりて色黒く其力つて石臼を奉るを重
とせば然れども心賢なりとて道を行ひ其より三十ふ成やと夫をえ
らして何方へも往事あり父母の故をといへば孟光が曰く我の梁鴻が
ては賢なる夫に嫁ん事を願ふると云たり梁鴻の事を聞てを

娶んと永人とて孟氏が方へ云入る父母大に喜びて即ち是を
許しけり孟光布衣麻の屨彷彿其具を求めつる父母の財産
も豊富なりけり装束れより廉く製て送り遣はける斯て嫁
入て七月あるもとも梁鴻さうに物言ひ孟光跪つて問て曰く
妾竊に君に高義を聞ひ妻に此女子を嫌ひ存けて迎はれ今妾
を擇て娶る今日七月ふみふみ物言ひの抑妾が罪
は何ぞやと梁鴻が曰く吾の素衣褐衣を著る妻を得て與ふ
深山に隠れ名をのぞき心を樂んと思つて汝に今綺羅を重
ね脂粉をとりての美く饒る豈梁鴻が妻あるんやと是を
聞て孟光が曰く妾其たけり無ふあはれ今は衣服の親れ家を出
ると死父母の賜るを今日まで著てさうへ夫に命を聞かんと

孟光



従ひ進しるぜざらんやと頻しばしばて退ひきれて髪かみと推髻おしこやの布ぬのれ衣ころもをきて
 麻あされ履くつをきてた容ようをまなてて出い来きせり梁りやう鴻こう大だいのこ情じやうびあむ
 こを我われ寔じつは妻めるむとう我われ奉ほうせよとて名なの孟もう光かう字しの德とく曜やう
 と稱なづけり斯かくて孟もう光かう貞じん節せつの事ことをさ数さう月げつあつて一いつ時とき夫そ云い
 やう常じやうの因きんぬ君きみのて閑居かんきよの心こころに志しありと何なんぞ黙もく々々と
 て斯かくるるとた鬼おにの月つき目めを過へぐめやと梁りやう鴻こう因いんて寔じつは然しかる
 事ことと即すなはち連つて霸は陵りやうは山さん中ちゆうへ入いりて田でを耕かうふ孟もう光かうの布ぬのをきて業わざ
 とのち後のちふ呉ご越えつの國くにへ適てきて卑ひ伯はく道どうとのち富とみる人ひとの廬いの下したをかりて
 住す人の為ために春はるの節せつに賃ちんをとりて妻めと與あふ孟もう光かうの布ぬのをきて
 朝あさ夕ゆふの食しきを調てうふ夫そ具ぐなるふ敢あて梁りやう鴻こうが前まへへ仰あやみ見みる
 眉まゆのひらへ膳ぜんをささげて禮れいを恭こうに唯ただ大だい君きみの事ことをさ如ごとく

あり卑伯道は体と看て是凡人ありと思ひ家を造りて與けり
は夫妻名を隠し身とのぞき世を厭ひ患をさけて唯書きて心を
樂と安然として世を送り後遂に其去處を知り後漢書あり

○董氏

唐は徳宗皇帝れとて賈直言といひ者禁中此事をせしむら
る過ふりて南海に流る直言妻に別る時あん身は尚
若しある人あり身をよめて我を亡めぬと思ひさる命
かゝる事は不定なりと云ふは董氏泪とてりみ答てり凡女は
二人此夫に逢ざるを道とて然る君今流さるひ後とて又
再び人自身を許しと有るべしと云て頻て一筋に麻繩を
りて我髪をちりと縛り願ふ是に封じて給るべしと云直言のる

董氏



そけいども一向ふ云けりまを今んとて詮方々其根りとも封印しつり
董氏のいふは世後れ世やても君が手より外に收るる目をとる
せど堅く誓て遂に別て去りたり直言の嶺南といふ處に流さ
れしが二十二年を経て直言やかへてきて古郷に歸るる妻は董
氏大いふ喜びかゝり結び髪と直言に解せり夫で髪はむれ
俟て櫛をいふに今急に封をとる油をさうに洗ひつるまど髪を
脱ちて禿婦とぞ成りたり
禿婦の俗ふりふ
やうなもあやう
獨異志ふる也

○於栗

是のいふに近に世に事あるまども今思ひ出さるは中ふかへり
甲斐に國八代郡甲村といふ處に農夫安を勝といふ者有けり
其妻を於栗といふ貞節に女なり其親の何れもやまはるに

於栗農夫は妻を似もやうで夫の事と恭敬し信をついて丹に
宿をりてなり如る夫あり病ふかゝりて年久く悩ま臥るるまど
其介抱する人ふ雇は使はるる賃をとり藥を求めて夫と與
へ夜に病はる病といふに撫さるに居るに結續して布を
あり人ふ賣て其價をりて夫をやう人ふ是を感賞しけり
然ども田舎れりいふに凶に病人ある家あり怖れて訪る人あり
夫は病いふに重き今に二寸もあひ事能はるに於栗は心
を用ひ身と苦めて價高に藥をのりて夜に汚るる物を洗ひ
介抱する有る有りけり時享保十三年七月半數日霖雨あり
つむが一日忽ち笛吹川その外に河々小川に至るや大水溢る
いで田畑ふや入大木を倒し家を流し村をば百姓も八方へん

甲斐の
於栗



乱して親と助け子を背かひ夫をいさなり妻を引つて命一ツを助らんと
 喚び咄んでゐる高に岡へぞ逃のかりぬはと死に於栗へ夫を引ぬ
 てい見さむとも身中を肥さむとてふ寸も動さば負んとさむと
 も痛思ふとさむと協つた水に流れ上三尺ありも昇り家のあふくとして
 崩れかゝる雨隣れ人々見え堪へぬとせ来り於栗小疾く逃よと云ふと
 とも逃ぐ夫苦しに思れ下より我身はとも死べた身さむは水に
 流さむとも惜るるに汝も年若く生向あつ身なり我を捨てとさく
 逃よと云ふととも於栗さうに岡へ入る生てばう夫婦ふあはれ死に
 此後も夫婦なりは期ふあはれ何ぞ夫を捨て身を助らんとと
 る道あらんや死をりつとも死べたうと一寸も動さむは近隣の
 人々の何れも我身大事さむとさく逃よと云うて或はやうに

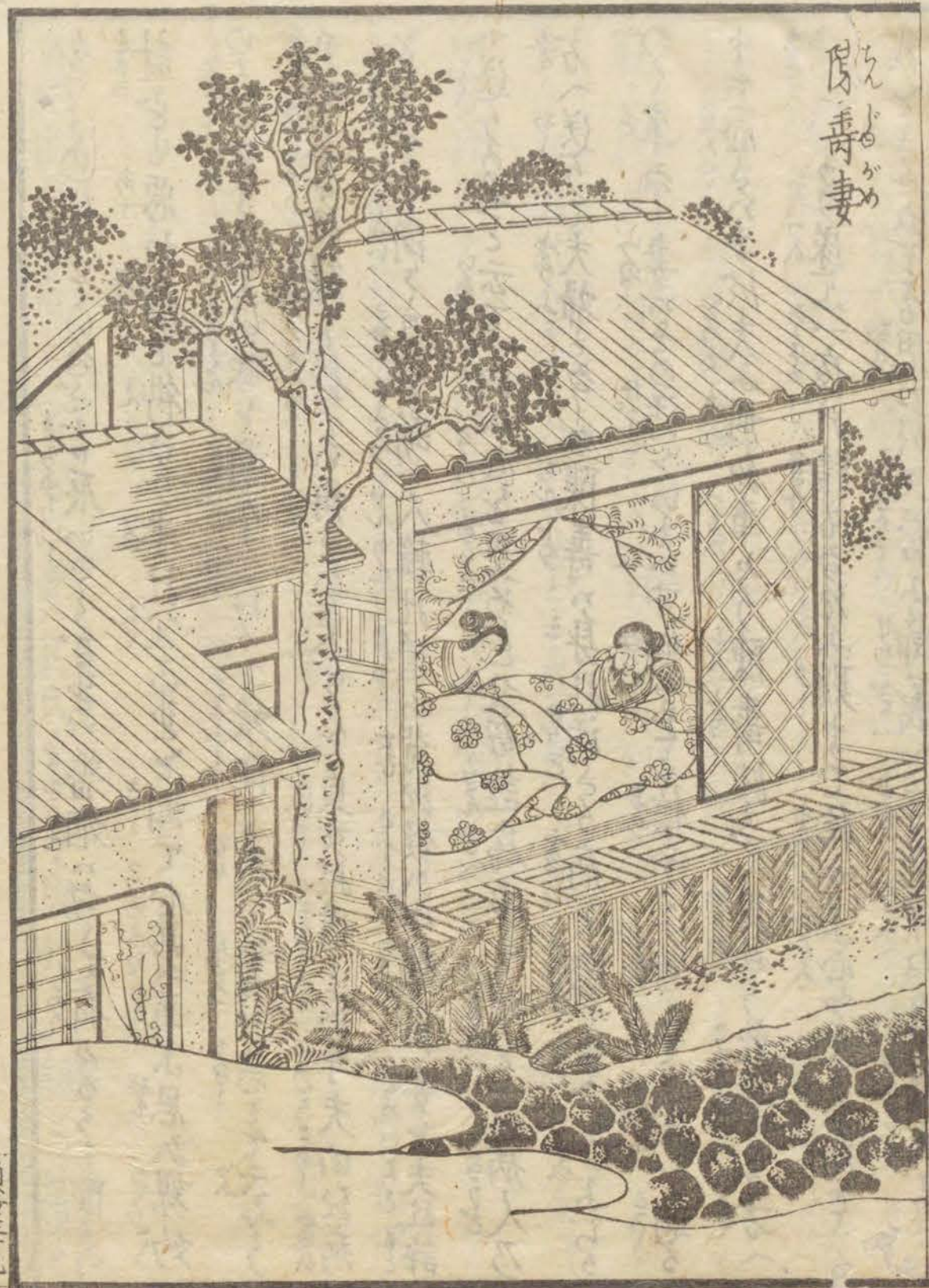
板戸のり皆八方へ逃さるぬ忽ち大山北より高波うち来りて
於栗の家もろく逃さる於栗の夫をうと抱死け水も流れて死な
其後水ひたて遙遠くより於栗が死骸を見出しるが猶夫を
賔と抱きて有るふぞ人皆その貞列を感ずるとぞ此物ぐら
先年其國に人來りて語々ども虚實いふと思ひ居るに近來
甲斐に國をよびて伊左和と云々一處あて一箇に石碑を見
彼栗が節義を文につづて世に著せり文章の目言に神官信濃
守光章書に甲陽北鎮基近江守一柳直敬とあり是を以て實事
を知て此書ふやうて是を補ふの

○陳壽妻

明に世に陳壽といふ者其妻の其氏さるるに始その親々縁組と

かゝるに終つていぬ吉辰いふとむむ婚姻ありて有るうち陳壽
計ども思ひ病を得る妻に父の事を聞て心憂事と思ひ嫁約
の人ふかゝりては縁を断んとけるを娘聞て大に驚死悲と云々
凡女にさび縁を極て再び更さるる貞女に道と云今夫凶に病
を受ると聞て是を断る人輪に道に背死候ひぬ願ふ妻を夫に許
へ送りめと云て一向小心を更めと父母詮爲るる娘を病人乃
方へ送りて夫婦と云ぬ陳壽の身れ汚る病を慙て更女ふら
づ事なり妻のその汚をいといす何とと信やう物して三年を過
やで心より夫の冊に事々陳壽は思ひ此妻の方へ
来りしより遂に一夜に情もあらふ斯やで信やう心を尽し汚る
我をきこぬとも思ひ只管節義を守り事ぬの寔ふの

陽壽妻



貞女あり我病とても愈へ病ふあはれいつやも斯浅きう存命居
て女小物を思ひし事いと罪多し此業ありし今いとし死なむと思
ひ極め密み人を雇て砒霜といへる毒薬を求てふくしき妻を
を悟て大いふ驚死悲しとさる方あり我もあはれ同じ道やと彼
毒薬に残るるをて吞り夫婦ともみ服し血を吐てふふと
うり少時ありて二人とも起上り陳壽の年來れ病愈て元の
まじし死身とありぬ妻もまじし事ありて死にけり然してより後の
偕老れ契大あさかばに二人れ子をまじけ家も月ふそひ榮あり夫
のさだよりこ心小妻れ貞心天小通し神明感應ありけりあや毒變ド
て其れとあり悪病とあり愈るる不審ありまじし尊々を復齊回
記ふるるく見たり

○文德皇后

唐の文德皇后と申すは其氏の長孫氏太宗皇帝の后と號衛將軍長孫晟の女なり常に大祖の事にて孝行しく儉約れ道をとて
る万般要用れめ外にこれに亦めさせめれば平生書とよみて樂し
む御身れ粧ひをば些う忘らるるに帝いと重く思入させむ
せれ政事とて問ふにわづらふ事度々あるをば此雞れ且を告るは
是家れ災ひありと云る古語ありは候ふもさういへ給れば唯
何と云に御寐の語あり昔より小事とて帝の御心づけ奉り
政事れ佐とるもの事浅くは宮人れ内におる御咎とる
者あり其時の帝の御心同トやうに申居させむは後御け
きを看てやうに説和めさせめふよりて後宮れ裡に一人に在てつこ

ありける者なりけり別腹に皇子のては給へば其母れいや
れを以宣ひて自ら生ぜむる皇子より勝て愛するもの事させ
給ひける宮人の病に臥事ありて自らきよめするものを
與へ藥するも誠をめて與ふにめ一向にせ給ひけるあぞ
宮中の人々親を敬ふるはありけり后に御兄長孫無忌と
いひけるは年来軍功ありけるは高き司におはけて
せけることも為さるる帝の豫てより宣ひたれども后の外戚
の政事ありける昔より善らぬ倒し侍とてまじし止めさせむ
る然れども思入る事ありて尚書僕射に推任せむるを
后は其思をいさめて辭し告さるるに諫議大夫魏徵とてその
君を諫て誠忠を尽しけるを帝一時朝政をて宮中におはる

文德
皇后



我鄙夫と殺んと怒て宣ひたるを后誰が事とて候ふと問ふ帝
 魏徴めが朝廷めて我を辱しむる事度とて問ひたる后是を問
 てつと立退めりふ御装束着てさそひ表々々殿れめん前ふ
 出て拜賀する帝驚をさひ何故ぞと問ふと后めん答ふ昔
 より君明うるを臣直と申て来り侍るなり今魏徴が申は
 言れ直なる君明ふあかき故なる是最もめでと思ひ奉り
 斯拜賀して祝ひ奉るなりと問ひたる帝是をゆめ最惜を
 めひ魏徴が事止むなり其一は皇子兼乾自太子ふ立たる
 とは太子は御乳母より東宮に御調度とて候へどもを
 増せりと申けるを后聞て太子の徳は少なりと心憂とるれ
 調度の些は苦むべとて増せむらび或は帝と與ふ九成

官より行幸せしけり俄に物騒し事ありて上御より武具を
て出て其事を聞さる給ふ事ありて時節后の病を打臥せし
ころ所と聞ゆて則ち御爽ふたけ乗らむと與ふ出る人
比止め進ませけむと帝に驚をせしを聞かむ易て在るべきと
宣へ是より御惱まりしをひけむと太子御祈れ為大赦を行
ひ弘く僧道弘養を行はせしと仰せありけむ后曰ふ死生命あり
人れ力のおよぶに憂ふべし我平生の悪をせむと神仏を召し
命ふべし祈て助るべしと祈むと治るべし其上大赦の
常ありぬ政事あり佛法道教あり異端は俗行きて君つひ好
やせのべし我祈れ為しと常ありぬ事を行ひ世を動し人を惑す
事とせんやと免さるるに御惱目ありて重せむの時節房玄

齡といへる忠臣帝に御氣をせむ事ありて引籠て在るを
和めさるるひと玄齡君つひと事久く心を責てつと
際く君と秘計し事つと洩る事なり願ふ渠を乗せ給
ふとありと總て君に御為ふひねがふと常ふ君子を親し小人を
遠ざけ諫をうけ諛言をきけしけし人民をいさめ遊獵を止せ
めひるが妾黄泉の下やと心易く侍はるると囚ひて目ごる御
袖に裡ふかく持せのひと毒藥を出して帝に見せ進せ君が万
歳は後やと與ふる侍り同道ふおん供やうとん為ふめ
物をたぐひ候へど世の際ありて先づちやうするありと囚ひて皇子
とら着せしめて悲をせむと心乱る障ありと遠ざけ御心靜
み終つてのひと御年三十六あり此後古れ婦人の言惡を集て

女則とある書二十卷を作し残さるる後、文德皇后とあり、
名をさし給ひ石碑に詞に帝に御製をて建め、其後やう
高宗帝に御せしむる文德順聖皇后とあり、名を加へられ
實ふ是女姓に聖人とあり、奉るべきは是水あぞおろけり

和漢廿四貞女傳

八島五岳圖

貞女四十三



嘉永二酉年四月

京都

書林

俵屋清兵衛

南紀若山

帶屋伊兵衛

女則とある書三千卷を作て残さるる後々文德皇后とあり
 名ヤとあり給ひ石碑に詞の帝に御製をて建ふ其後より
 高宗帝に御せとあり文德順聖皇后とあり名を加へる
 實ふ是女姓に聖人とあり奉るべきは是ホあぞおのけり



和漢廿四貞女傳

八島五岳圖

貞女四十二

嘉永二

書林

書林

數

焉

子

子

子

山

女

孫

名

斷